

戦争文学としての『赤い武功章』についての一考察

三 留 修

(1)

戦記物とか戦争小説といわれる分野の作品は古くから発表されている。アメリカ文学の中でも、アメリカ人が体験した南北戦争(The Civil War, 1861-65), 第一次世界大戦(World War I, 1914-18), 第二次世界大戦(World War II, 1939-45), 朝鮮戦争(The Korea War, 1950-53), ベトナム戦争(The Vietnam War, 1954-73)などを題材とした作品が数多く出版されている。

各時代の識者たちが、平和を願い、戦争の悲惨さについて訴えながら、現在も世界のどこかで戦闘が行われている。文明が進歩し、核の脅威にさらされながらも戦争の終結をみないところに、人間の限界があるのだろうか。有史以来、人間は戦争にまきこまれる生活をくり返している。無意味なこととわかっていても避けられない戦争の残した傷跡が、文学者の大きなテーマにもなっている。

戦争小説に関しては、(1)戦争は忍耐、連帯、苦悩に正面からぶつかれる機会であり、一般人が思いがけない力を出し、底力を発揮する。(2)戦争は科学技術社会の究極の目的となりかねない。(3)暴力が合法化されたとき、その結果として何がもたらされるか。(4)戦争は万全の組織化された政府事業計画にすぎない、というようなことが言われている。⁽¹⁾

これらの言葉はノーマン・メイラー(Norman Mailer, 1923-)やジェームズ・ジョーンズ(James Jones, 1921-)の作品の中にみられる。主人公を含めてすべての登場人物が正気を失ってしまうという作品を描く作家もいれば、表面上はあくまで冷静に行動する人物を描く作家もいる。

アメリカ文学の戦争小説で知られているものとして次のような作品がある。ステイーヴン・クレイン (Stephen Crane, 1871-1900) の『赤い武功章』 (*The Red Badge of Courage*, 1895), 『オープン・ボート』 (*The Open Boat*, 1898), 『戦争はやさし』 (*War Is Kind*, 1899), アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961), の『武器よさらば』 (*A Farewell to Arms*, 1929), 『誰がために鐘は鳴る』 (*For Whom the Bell Tolls*, 1940), ドス・パソス (John Dos Passos, 1896-1970) の『三人の兵士』 (*Three Soldiers*, 1921), ジェイムズ・ミッチェナー (James Michener, 1907-) の『トコリの橋』 (*The Bridge at Tokori*, 1953), ノーマン・メイラーの『裸者と死者』 (*The Naked and the Dead*, 1948), カミングズ (E.E. Cummings, 1894-1962) の『巨大な部屋』 (*The Enormous Room*, 1922), ジョン・ハーシー (John Hersey, 1914-) の『アダノの鐘』 (*A Bell for Adano*, 1944), 『ヒロシマ』 (*Hiroshima*, 1946), アーウィン・ショー (Irwin Shaw, 1913-) の『若きライオンたち』 (*The Young Lions*, 1948), ハーマン・ウォルク (Herman Wouk, 1915-) の『ケイン号の反乱』 (*The Caine Mutiny*, 1951), ジェイムズ・ジョウンズの『ここより永遠に』 (*From Here to Eternity*, 1951), 『ピストル』 (*The Pistol*, 1958), 『細い赤い線』 (*The Thin Red Line*, 1962), ジョウゼフ・ヘラー (Joseph Heller, 1923-) の『キャッチ・22』 (*Catch-22*, 1961), ジョン・ホークス (John Hawkes, 1925-) の『人喰い人種』 (*The Cannibal*, 1949), カート・ヴォネガット (Kurt Vonnegut, 1922-) の『第五屠殺場』 (*Slaughterhouse-Five*, 1969) 等である。これらの作品は、前述した戦争に加えて、米西戦争 (The Spanish-Cuban-American War, 1898) とスペイン内乱 (Civil War, 1936-39) などが題材にとりあげられている。いずれの作家も、戦場の人間を描くことで芸術にまで高められるとして、アメリカでは大量の戦争小説が発表されている。そこでは大きな力によって翻弄される人間の姿が描かれている。

(2)

『赤い武功章』は、ステイーヴン・クレインを有名にした作品で、アメリカの戦争小説の古典として、ヘミングウェイの『武器よさらば』と並び称さ

れている。クレインは兵士としての体験なしに、南北戦争に関する文献を読み、この戦争で生き残っていた老兵たちから、体験談を聞きあさってこの作品を書いた。とくにこの作品の場面としてクレインが描いたのは、1863年4月末から5月にかけてのチャンセラーズヴィル (Chancellorsville) というヴァージニア州の小さな村での戦闘である。⁽²⁾ しかし、作品の中には地名はごくわずかししか出てこないし、日時はまったく出てこない。また、主人公のヘンリー・フレミング (Henry Fleming) も、ほとんどの場合、ただ「若者」 (the youth) として登場している。

戦闘場面はもちろん随所に描かれているが、この作品では登場人物の心理的な面に重点がおかれている。他の戦争小説においても、どちらかというとな登場人物の心の動きを中心に描かれているものが多い。戦争での個人の体験がいかに正確に描かれたとしても、読者に現実のものとしては伝わりにくいものである。

主人公のヘンリー・フレミングは、戦争を「自国の戦争を不信の感をもってながめていた。それは一種の遊びごとにちがいないと思った」 (From his home his youthful eyes had looked upon the war in his own country with distrust. It must be some sort of play affair.)⁽³⁾ とみていた。そして彼は、行軍 (marches) とか、包囲 (sieges) とか、戦闘 (conflicts) とかという記事を読んで、自分の眼で見たいと思うようになった。彼は英雄を夢見て、母のとめるのも聞かずに入隊してしまう。入隊した部隊は駐屯地に着くたびに、食事を与えられてちやほやされたので、彼は本当に自分は英雄にちがいないと思いこむ。現実の戦争は死闘の連続で、その間は睡眠や食事の暇もろくにないものと思こんでいた若者は、野営陣地で何ヵ月もじっとしている生活が続くので、命がけで戦おうという厳しい感情が失われていく。と同時に不安な気持ちになっていく。

作戦について何も聞かされていない若者たちは、何の前ぶれもなくいきなり激しい戦闘にまきこまれる。この作品の中で、クレインは、戦争を「怪物」 (monster) とか「機械」 (machine) と呼び、兵隊たちはその巨大な機械の小さな一部分として行動を強いられる。英雄であると思っている若者も、実戦

では逃げ出すのではないかという不安を次のように表現している。

暗闇の中に、彼は幻影を見た。それはほかの者が平然として祖国のために働いているのに、自分の背後では無数の舌を持った恐怖心がベチャクチャしゃべって、自分を逃走させようとしている幻影であった。彼はとてもこんな怪物と対抗することはできそうもないことを悟った。(In the darkness he saw visions of a thousand-tongued fear that would babble at his back and cause him to flee, while others were going coolly about their country's business. He admitted that he would not be able to cope with this monster.)⁽⁴⁾

やがて現実の戦闘にぶつかると、若者は突如逃げ出し、さらに脱走をくわだてる。そして「自分が逃げたのは全滅が近づいてきたためだ、と彼は自分に言い聞かせた」(He had fled, he told himself, because annihilation approached.)⁽⁵⁾ と考えたり、次のように自分の逃走を正当化しようとする。

頭を働かせてよく考えれば、不可能なことは分かっているのに、その陣地を守ろうとした彼らの頭の悪さ、そのために彼はひっくり返され、踏みつぶされたのだ。彼自身は、暗い所にいても遠くが見える眼力の持ち主だから、すぐれた知覚と知識によって逃げたのだ。彼は戦友たちに対して激しい怒りを感じた。彼らがばかだったことは証明できる、と彼は知った。

(He had been overturned and crushed by their lack of sense in holding the position, when intelligent deliberation would have convinced them that it was impossible. He, the enlightened man who looks afar in the dark, had fled because of his superior perceptions and knowledge. He felt a great anger against his comrades. He knew it could be proved that they had been fools.)⁽⁶⁾

また、若者は森の中に逃げこんでみると、リスが物音に驚いてすばやく逃

げる姿を見て、彼は「自然」(Nature) が同じ考えであることを感じながら、自分のとった行動を正当化する。リスの行動を見て、若者は勝ち誇った気持ちになり、「自然」は心に落ち着きを与え、生命をもった美しい野原であり、悲劇を嫌う女性であると想像した。しかし、彼はたえず後ろめたい罪の意識にさいなまれる。恐怖感におそわれた若者が、ひたすら逃がれようとしているときに、幼なじみの戦友ジム・コンクリン (Jim Conklin)に出会う。ジムは負傷して後方へ退却するところだった。若者はジムの看護につとめるが、ジムはまもなく息をひきとる。若者は途方にくれるが、彼と同じように恐怖のために退却するひとりの兵士と出会う。ふたりのあいだにちょっとしたいさかいがあり、その兵士が「小銃を器用に力いっぱい振りまわした。それが若者の頭にガツンとぶつかった。男はそのまま走り去った」(He adroitly and fiercely swung his rifle. It crushed upon the youth's head. The man ran on.)⁽⁷⁾ ために頭に傷をうける。この怪我があとで若者に幸いするのである。もっともこの負傷も「弾がかすったのだ。まるでだれかがお前の頭を棍棒でなぐったみたいへんなこぶができている」(Yeh've been grazed by a ball. It's raised a queer lump jest as if some feller had lammed yeh on th' head with a club.)⁽⁸⁾と治療をうけるときに、なぐられた傷だと見破られそうになるが、人の良い兵士たちはそれ以上せんきくしようとはしなかった。

若者は傷を負い、気を失いそうになりながら、何とか部隊にたどりつく。彼は歩きながら傷のことばかり考えていた。痛みがあるうちは自分の状態を測れると思っていたが、痛みを感じなくなると、彼は不安におびえるのだった。そのうちに故郷のことが頭に浮かんでくる。そうこうしているうちに、彼は部隊の戦友に出会って助けられる。はげしい戦闘のあとの部隊では、戦友の人間性が大きく変ってしまっていた。「声の大きな若い兵士」(the loud young soldier)はヘンリーにやさしく気を配ってくれて、ほしい物を食べさせてくれた。

戦闘を経験したことで、若者だけでなく他の兵士の人柄も変化していく。ここですぐに主人公の「成長」と言えるかどうかは速断しかねるが、とにかく

くヘンリー・フレミングは人が変り、したたかになっていく。彼は最初の戦闘で逃げ出したことも、頭の負傷が味方になぐられたものであることも、見つかる心配がなくなり、「彼は今や自尊心を完全に取り戻した」(His self-pride was now entirely restored)⁹⁾のである。彼がふたたび男らしい態度をとれるのも、「もう何も見つかりはしないのだから、裁判官の目と自分の目が合ってもひるむことはなかった」(Since nothing could now be discovered he did not shrink from an encounter with the eyes of judges.)¹⁰⁾からである。それどころか、自分の逃去は棚に上げて、「彼は戦場から逃げ出した兵士たちのことを思い出した。彼らの恐怖におびえた顔を心に浮かべて、彼は軽べつした」(He remembered how some of men had run from the battle. As he recalled their terror-struck faces he felt a scorn for them.)¹¹⁾というように変ってしまう。この段階ではまだ勲章ものだとほめられるかどうかはわかっていないが、この後のヘンリーは人がすっかり変り、軍旗をもって最前線に立つほどの勇気を示すのである。

しかし、若者はときに精神状態に異状をきたしたような行動にでる。他の兵士も同様の状態になる。

この猛烈な突撃によってひどい混乱が起きた。気ちがいのように突き進む兵士たちは、どっとときの声をあげたが、それは暴徒のように野蛮な声でありながら、また鈍い者や無感動な者をも奮い立たせるような奇妙な調子をもった声であった。それを聞くと興奮のため気が狂って、みかげ石やしんちゅうにぶつかっても、前進をやめられないのではないかと思われた。そこには絶望や死と対決し、優劣の差を平気で無視する熱狂的なものがあった。それは一時的なものだが、自己を放心させる崇高な精神であった。おそらくそのような精神状態であったからこそ、あとになって若者はなぜ自分がそこにいるのかを不思議に思ったのであろう」(There was a frenzy made from this furious rush. The men, pitching forward insanely, had burst into cheerings, moblike and barbaric, but tuned in strange keys that can arouse the dullard and the stoic. It made a mad enthu-

siasm that, it seemed, would be incapable of checking itself before granite and brass. There was the delirium that encounters despair and death, and is heedless and blind to the odds. It is a temporary but sublime absence of selfishness. And because it was of this order was the reason, perhaps, why the youth wondered, afterward, what reasons he could have had for being there.)¹³

田舎のごく普通の青年が、恐怖のために戦場から逃げ出したばかりなのに、わずか2日間で人間がこれほどまでに変わってしまう。これが戦争という精神の極限状態での人間の行動なのであろうか。

恐怖心が幻覚に移り、そこに疲労が重なってある種の陶酔状態にまでなると、そこでごく普通の人間が、信じられないような行動をやったのけることになる。『武器よさらば』のフレデリック・ヘンリー (Frederic Henry) は重傷を追いつつも回復すると前線に復帰するが、カポレットの大退却のときにはスパイにまちがわれ、身の危険を感じて川にとび込み逃走する。『誰がために鐘は鳴る』のロバート・ジョーダン (Robert Jordan) は終始冷静に指揮をとり、当初の目標を達成し、最後には命を落とす。ヘミングウェイの描く戦争小説の主人公は、冷静に行動し、興奮することは少ない。スティーヴン・クレインの描くヘンリー・フレミングは、年令的に前述の2人よりも若く、参戦前には戦争をロマンティックに考えていたせいもあり、精神のぐらつきがはげしい。実際に戦場へ行つたことのないクレインの作品の登場人物のほうが、何度か最前線に出かけ、負傷までしたことのあるヘミングウェイが描く人物よりも、戦闘場面での描写がくわしく、激烈である。

若者も他の兵士も自分を失い、一時的に狂乱したような行動をとるが、将校や連隊長たちもこの若者たち同様「進め、こんなところでぐずぐずするな、進むんだ」("Come on! Yeh can't stay here. Yeh must come on.")¹⁴ とわめきちらしたり、小尉が次のようなことを言ったりする。

小尉は意気ようようとしていた。彼は戦闘に酔っているようにみえた。

彼は大声で若者に言った。「まったく、お前のようなあばれ者が1万人もいれば、こんな戦争は1週間たらずで息の根をとめてやれるぞ。こう言って、彼はひどく威張って胸を突き出した」(The lieutenant was crowing. He seemed drunk with fighting. He called out to the youth: "By heavens, if I had ten thousand wild cats like you I could tear th' stomach outa this war in less'n a week.!" He puffed out his chest with large dignity as he said it.)⁽⁴⁾

若い初年兵たちも、訓練を受けた上官も戦闘の真っ最中の精神状態は同じようなものに描かれている。ここでほめられている若者にしても、度を失って、訳もなく相手に対して憎しみを感じ、怒りは陰険で狂暴な亡霊となって彼にとりつき、彼は残虐な夢をみていたのである。このようにして、若者は普通の田舎の青年から勇気ある兵士に成長していくようにみえる。しかし、若者の精神状態は戦闘中にだけは、狂気に近い状態になってしまうのである。勇気ある兵士になるといっても、若者は敵前逃亡したことが他の兵士にわかっているのではないかと思ったり、罪の文字 (the letters of guilt) がちらつくのである。そして、

ときどき彼は、負傷兵たちをうらやましそうな目つきで眺めた。彼は傷だらけの体をもった者たちは、さぞ幸せだろうと想像した。そして自分も負傷したい、赤い勇気のしるしがほしいと思った。(At times, he regarded the wounded soldiers in an envious way. He conceived persons with torn bodies to be peculiarly happy. He wished that he, too, had a wound, a red badge of courage.)⁽⁵⁾

ということを考えるのである。タイトルにもなっている a red badge of courage、つまり負傷をして若者は一人前の兵士になりたいのである。相手を何人殺すかというよりも、自分が血を流せば戦場で闘った証明になるからである。「名誉の戦傷」に憧れる若者は、大庭勝氏が言うように、ひどく自己

中心的であり、臆病なくせに戦場でのなばなしい功名を夢みている。若者の行動には自分の願いとはちがって、逃走のうしろめたい気持ちをもち、負傷していないのに負傷兵のあいだにまぎれこみ、どこに怪我をしたかと聞かれて誇りを傷つけられる。⁹⁸ 前述したように、そのような気持ちのぐらつきがおさまリ、勇気もわいてきた頃に、以前の望み通りに負傷させられる。それもなぐられてできた負傷であるのは皮肉だが、とにかく一人前の兵士とみられ、上官にも認められる。

戦闘が一段落して撃ち合いがほとんどやんで、兵士たちのなかに雑談するゆとりができてくると、また若者の頭の中には微妙な変化が起こってくるのである。ふだんの考え方に戻するのに時間がかかり、彼はなかなか戦闘時の精神状態から脱出することができなかったが、しだいに前よりも周囲のものについて理解できるようになる。その後若者は、自分がしてきたことの失敗や成功について検討しはじめる。そして、彼の日頃の思考の「機械」が動きをとめていた世界、つまり羊のようにおどおど振舞っていた世界から脱け出して、自分の今までのすべての行為を整理してみようとする余裕がでてくる。

他の兵士が敬意をはらって話してくれるとき、若者は身振いするほど嬉しくなり、自分はよい働きをしたと感じる。しかし、最初の戦闘で逃走した記憶の亡霊 (the ghost of flight) が目の前に現われ、踊るので、顔が赤らみ、「魂の光が恥ずかしそうにちらちらした」 (The light of his soul flickered with shame.)⁹⁹ のである。そして、彼を非難する幽霊 (a specter) が現れ、ぼろ服を着た兵士 (the tattered soldier) や背の高い兵士 (the tall soldier) を思い出させ、そのために自分の秘密が見破られるかもしれないと冷たい汗がでてくる。一度は自分の恥ずべき行為が見つかるはずがないと確信するのに、戦闘が静まってみると、また幻影にとりつかれる。どんなに別なことを考えようとしても、戦場での逃走の陰うつな亡霊が彼を追いかけてくる。若者の有頂天だった気分は押しつぶされ、自分のあやまちがよみがえって、一生この亡霊にとりつかれ、戦友にも心の中を見抜かれてしまうのではないかとおびえる。しかしながら、まもなく若者はいつもの自己中心的な考え方をするようになる。

それでもしだいに彼は、罪の意識を遠くへつき放す元気を回復した。そしてついに彼の目が、いくつかの新しい方向に開かれたように思われた。彼は以前の信条の、ずうずうしさと思いあがりを出して、それを正しく見ることができることに気づいた。彼は今やその考えを軽べつしていることを発見してうれしく思った。(Yet gradually he mustered force to put the sin at a distance. And at last his eyes seemed to open to some new ways. He found that he could look back upon the brass and bombast of his earlier gospels and see them truly. He was gleeful when he discovered that he now despised them.)¹⁰⁸

このように若者は考え方を変え、確信すると、自信がわいてきて、自分は静かに成長し、大人になり、もはや死に直面してもひるむことはないと思うようになる。若者は「戦争という赤い病気」(the red sickness of battle)を退治してしまったと確信する。

(3)

戦争は時を経るにつれて、どんなに残酷な場面や緊迫した場面を描かれても、どこか自分には関係のないところで起こったものという受けとめ方をされる。現実の姿を写實的に描きながらも、作り物のように感じられてしまう。戦闘の場面を文字で効果的に伝えることはむずかしいから、どうしても人物の心の動きに重点をおくことになる。『赤い武功章』でも、全編戦場での戦闘が描かれているが、ヘンリー・フレミングを中心とした兵士の精神の変化が描かれている、といってよいであろう。

この作品の戦場の場面や兵士の言動が見事に描かれているのは世評通りである。しかし、最後の部分で、若者が悟ったような気持ちになっていくくだりは、話ができすぎているような感じもする。若者の心の傷跡は、故郷に帰ってからもかならず残るはずである。そこまでは描かずに、スティーヴン・クレインは戦場での若者が心の区切りをつけたところで物語を終えている。「失われた世代」(Lost Generation)の作家たちは、戦場の場面とともに、戦場から帰還した兵士たちの目標を失った姿を描いた。そして作家たち自身が戦

争を体験している場合が多い。ヘミングウェイの『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926)の主人公ジェイク・バーンズ(Jake Barnes)とロバート・コーン(Robert Cohn)、フィッツジェラルド(*Scott Fitzgerald*, 1896 - 1940)の『偉大なギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)のギャツビーは退役軍人で、彼らの退廃的な生活が描かれている。

現実にあった大量の死が小説の中に入ってくることはめったにない。また、戦争の陰で苦しんでいる家族の姿が描かれることも少ない。生と死、人間社会のもっとも狂った行為が戦争であり、戦争小説を書く作家たちも、それをテーマにして戦争の恐怖を徹底して描こうとする。しかし、いずれも小説の形になると、戦争があまりにも小さなものになってしまう。作品としてまとまりすぎたり、きれいごとになっていたり、死を描きながらも死を感じさせない小説になっている場合が多い。

多くの国々で、いつでも戦闘を開始できる準備をしてある一方で、平和を唱える矛盾の中で現代人は生きている。いつ、どこで戦争が起こってもおかしくない状態の中で人間が暮しているのは、今も昔も変りがない。戦争で一番被害をうけ、苦しむのは民衆である。国家の力がますます手に負えないようにふくれ上がっていくとみられる現代にあっては、戦争は日常生活のどこにでもある時代になってしまうのか。

戦場よりも農場にいるほうが、比べものにならないほどヘンリーのためによいと、説明する母親の説得も若者の耳には入らない。行政が指揮して、新聞で毎日のようにあおるので、その勢いにのせられてしまう若者を責めることはできない。クレインはこの若者の狭い視野に見えるかぎりの戦場の情景を描き、主として彼の意識の変化を追うことによって戦争の現実をとらえようとした。

時代が移り、文明が進んでも、戦争の形が変わるだけで人間は一向に戦争をやめようとはしない。文学の世界においても次々とすぐれた戦争小説が書かれていく。

注

- ① 『アメリカ小説の現貌—ヘミングウェイからメイラー』(Alfred Kazin :*Bright Book of Life, American Novelists and Storytellers from Hemingway to Mailer*, 佐伯, 大友, 小田, 北山訳, 文理, 1974) の第三章「戦争小説の衰退」(P.79-P.106) に述べられている。ノーマン・メイラー, ジェイムズ・ショウズ, ジョウゼフ・ヘラー, カート・ヴォネガット等について, 作品のテーマを説明している内容の一部である。
- ② 「チャンセラーズヴィルの戦闘」であろうということについて, ハロルド・ハンガフ・オードは次のように書いている。

The name of the battle in which Henry Fleming achieved his manhood is never given in *The Red Badge of Courage*. Scholars have not agreed that the battle even ought to have a name; some have implied that it is a potpourri of episodes from a number of battles. Yet an examination of the evidence leads to the conclusion that the battle does have a name — Chancellorsville. Throughout the book, it can be demonstrated, Crane consistently used the time, the place, and the actions of Chancellorsville as a factual framework within which to represent the perplexities of his young hero. (*The Red Badge of Courage*; Harold Hungerford, Norton & Company, Inc. 1976, P.157)

- ③ Stephen Crane : *The Red Badge of Courage*, Random House, 1951, P.5.
- ④ *ibid.*, P.34.
- ⑤ *ibid.*, P.82.
- ⑥ *ibid.*, P.83.
- ⑦ *ibid.*, P.130.
- ⑧ *ibid.*, P.144.
- ⑨ *ibid.*, P.161.
- ⑩ *ibid.*, P.162.
- ⑪ *ibid.*, P.163.
- ⑫ *ibid.*, P.197.
- ⑬ *ibid.*, P.199.
- ⑭ *ibid.*, P.181.
- ⑮ *ibid.*, P.99.
- ⑯ 『アメリカ小説の展開』(高村勝治・岩元巖共編, 松柏社), 1977, P.136.
- ⑰ *op. cit.* P.248.
- ⑱ *ibid.*, P.250.

これらの他に *Stephen Crane—The Critical Heritage* by Richard Weatherford (Routledge & Kegan Paul, 1973), *American Literature and the Experience of Vietnam* by Philip D. Beidler (The University of Georgia Press, 1982), *American War Literature 1914 to Vietnam* by Jeffrey Walsh (The Macmillan Rress LTD, 1982), 『アメリカ文学の新展開・小説』—アメリカ文学研究双書(4) (尾形敏彦編, 山口書店, 1983) 等を参考にした。

なお、この小論は昭和57年度佛教大学学会助成金を受けた成果の一部である。

